

本実践・研究から見えてくること

研究協力者 成田 龍一朗

(秋田大学教育文化学部 こども発達・特別支援講座)

道徳科教材「手品師」を題材とした本授業の道徳科教育法的特質

秋田大学教育文化学部附属小学校道徳科では今年度の研究テーマとして「道徳的価値に向き合い、自己の生き方をより深く、より豊かに見つめなおす子どもをはぐくむ学び」ということが掲げられている。これは学校教育目標の「自律」とも関わるものであるが、文部科学省が規定する道徳科のニーズを踏まえつつも、許容された範囲内で道徳教育の危険性として常に付きまとうパターンリズムを可能な限り排除し、子ども主体の教育を志向しているということができる。

とはいえ、これらのテーマの実現度それ自体は教員自身で判断されるべきところであると思われるので、本稿では、道徳科教育法的意義という観点に限定し、以下、本授業の道徳科教育法的特質を三点論じたい。

1. 道徳科における教材

本時の教材は「手品師」であった。「手品師」は道徳科の教材としてはかなりメジャーであり、数多くの実践が行われてきた。教科書に載っている「手品師」は、手品師が男の子のもとに行くという結論が提示されているが、本時において結論部分は隠されていた。

「手品師」は一般的にはモラル・ジレンマ型の授業の教材として扱われているが、この結論部分の提示は議論を先導してしまう危険性を有している。実際本時の授業においては「大会場へ行く」人と「男の子に行く」がおおよそ半々であった。このことは授業後の協議会においても、通常「男の子へ行く」が多いが、半々であったのが印象的であったという意見があがっていた。

道徳科の一般的な難点として、児童は他の授業同様に評価される主体として存在し、ややもすれば教師の想いや授業の狙いを先読みし、それに適応しようとする。しかし、そのような授業は失敗と言わざるを得ないだろう。授業の狙いと推察されそうな内容を慎重に排除し、児童にできる限り自由に考えてもらえる場を構築すること、このことは容易ではないが、本授業の教科書利用の工夫はその一助となるだろう。

2. 多角的な価値の導入

次に多角的な価値である。既述の通り「手品師」は一般的にモラル・ジレンマ型の授業が行われる。そこでは葛藤が中心に置かれている。それは本時でも大きく変わらないが、本時

においては指導案の段階において「正直・誠実」以外の「希望」、「責任」といった多様な価値が想定されていたことが特質として挙げられる。

現状において道徳科は価値項目を軸に進められる。このような教育の在り方の是非にはここでは立ち入らないが、少なくとも本時のように葛藤を中心に授業が展開される授業においては、その価値項目に固執するのは授業の障害となりうる。価値の多様性を前提として授業を構想することで、より本時の狙いの実現性をより高めていると言えるだろう。

3. 複数の「演劇的手法」の導入

本時においてはグループ内でのホットシーティング、葛藤のトンネル、全体でのホットシーティング、という三つの演劇的手法が導入された。「手品師」においてロールプレイングを取り入れることは珍しくはないが、これを独自の仕方でも三種類にして三つの場面を創り出したことは特質に値する。この構成は児童に飽きさせないという点に加え、葛藤を踏まえた感情の揺り動かしが起こる可能的機会がより豊かに提供されうるという点でも言えるだろう。

以上、本授業の特質を見てきた。本授業においては多様な工夫が取り入れられており、道徳科教育法的に実りある授業であったと結論づけることができるだろう。

i モラル・ジレンマ型の授業はコールバーグの道徳性発達理論を前提にしていることはよく知られている。コールバーグの道徳性発達理論に対してはケアの倫理などから批判が寄せられており、別様の授業方法も開発される必要があるだろう。この点は研究者側の課題としてここに提示しておきたい。